

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720180

研究課題名(和文) 声明譜における諸記号の日本語史的研究

研究課題名(英文) Historical Studies of the Japanese Language on the Musical Characters in the Scores of Shomyoo

研究代表者

浅田 健太郎 (ASADA, kentarou)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：50346045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、声明譜における「中音」という記号と長短記号である「火・短・矢・豆・消・引・延・持・長」について、歴史的変遷と言語との関係について考察した。「中音」という注記は、開音について当時の日常言語で使用された[o:]でなく、伝統的な発音である[&#596;:]で発音することを指示するために発明されたと推定できる。また短音記号について、短音記号が母音の無声化を反映しているという説を検証した結果、音声環境上の記号の分布と無声化の分布とが類似する点、無声化生起に関わるアクセントの条件が、節博士から推定されるアクセントと短音記号の対応にも認められる点から、無声化を反映していると推定できる。

研究成果の概要(英文)：This study considered a note called chuon (mediant) and short and long sound symbols used in Shomyo notation, focusing on their relationship with language. It can be presumed that chuon, the annotation used at the end of the Muromachi Period, was invented for instruction on pronouncing the broad vowel sound as [&#596;:], which was the traditional sound, instead of [o:], which was used in everyday language at the time. As for the short sound symbols, after examining the theory that they reflect vowel devoicing, based on the point that the distribution of symbols in the phonetic environment is similar to the common distribution of devoicing and the point that the characteristic that "the vowel that plays a central role tends not to be devoiced" is also found in the short sound symbols, it can be presumed that they actually reflect devoicing.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：国語学 言語学 音声学 仏教学

1. 研究開始当初の背景

声明資料の日本語史における利用については、アクセント史の究明に声明資料が使用され(金田一春彦『四座講式の研究』、三省堂、1964)、日本語史研究における声明資料の有用性が広く認知された。しかしながら、分節音レベルの問題については、音韻資料としての可能性が示唆されてきたものの、実証的な研究は桜井茂治「中世京都方言の音節構造 そのシラビーム的性格について」、『季刊文学・語学』81-92、1967)、金井英雄「母音無声化の資料としての声明」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一集』三省堂、1983)など、少数に留まる。

このような状況においてこれまで申請者は「火」「半音」「半」という記号についてその来歴と機能を論じたことがあるが(浅田健太郎「声明資料における補助記号『火』について 音楽譜における言語事象の現れの一例として」、『鎌倉時代語研究 第二十二輯』武蔵野書院、223-242頁、1999)同「声明譜に見られる『半音』の源流について」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第50号、207-214頁、2002))、未だ言語との関わりが明らかに指摘できる記号が多くある。

2. 研究の目的

これまで未考であった声明譜に使用される諸記号のうち、発声法に関するものを選んでその機能を考察し、言語との関わりを究明する。さらに、各宗派における使用実態を歴史的観点から分析し、各記号の来歴や機能を明らかにする。

3. 研究の方法

声明譜は宗派・流派ごとに異なる様相を呈するが、そこに使われる諸記号も同様に、複雑で多様な使用実態を見せるため、時代的にも、宗派的にもなるべく広範にわたる資料を渉猟することが必要となる。寺院や図書館、文庫に所蔵される声明譜の調査を行い、できる限り多くの資料を研究対象とする。

次に、収集した声明譜の資料性を吟味した上で、それぞれの声明譜における各注記の使用実態を、言語との関わりの中で確かめていく。さらに、注記間の相互関係や宗派間の影響関係、歴史的な変化を考慮に入れ、各注記の使用実態の全体像を明らかにする。

4. 研究成果

(1)「中音」について

「中音」という発音注記について、声明譜に観察される実態を主に日本語学的観点から検討し、その指示内容がどのようなものであったかを論じた。

まず、声明譜において用いられる「中音」「中」の注記は次のような種類があることが判明した。

A 範列関係にある「中音」「中」

A 1 曲節名としての「中音」「中」:

講式などにおける曲節の一

A 2 拍子名としての「中音」: 拍子の種類の一

A 3 音域名としての「中」「中音」: 音域の一

B 範列関係にない「中音」「中」

B 1 発音注記としての「中音」「中」

これらの声明譜における使用は、次表のようにまとめられる。

表1 「中音」の使用範囲

B 1 発音注記	A 3 音域名	A 2 曲種名	A 1 曲節名	
	◆			鎌倉
	◆			南北朝
◆			◆	室町
		◆	◆	江戸
◆		◆		近代以降
真言	真言	真言・天台	真言・天台	宗派

さらに、「○○ノ中音」という発音注記について、『魚山蔓芥集』の諸本を比較しつつ検討した。その結果、「中音」の使用例が十五世紀末から十六世紀初めの長恵まで遡れること、十六世紀中頃まではかなり自由に「中音」が付されていたが、以降は固定化していったことが確認される。ただし固定化した中においても、江戸時代に入ると徐々に整理されて数を減らしており、新たな部分に付されることは基本的にはない。これは実唱の上で「中音」で唱えられる部分が徐々に減っていき、それが順次譜に反映されていったということではないかと推定される。

すなわち、『魚山蔓芥集』における「○○ノ中音」は、概ね次の から のような変遷を辿ったと考えられる。

発音注記: 被注字だけでなく、すべての「アウ」型の字も同様に発音されるべ

きものとして意識されていた（十五世紀末から十六世紀中頃）

唱詠上の発声法を示す注記：注記された部分のみに適用されていた（江戸時代中期頃までに徐々に から へ性格を変えていく）

実唱上には反映されない注記：徐々に実唱上姿を消し、最終的には譜にのみ残る（明治時代以降）

また、「ノ中音」という注記形式の発生に関しては、声明における他の「中音」や、法華経誦読音の「中音」を援用したというよりは、日常言語で使用されない声明唱詠上の音声 [ɔ:] を表現するために独自に発生したものと考えた方が良いのではないかと考えられる。

## （2）長短記号について

短音記号「火」「短」「矢」「豆」「消」および長音記号「引」「延」「持」「長」について、歴史的変遷と言語との関係について考察した。まず記号の歴史的変遷について、日本語で唱える声明の譜本における長短記号を、152 点の資料によって調査し、次の結果を得た。

まず長短記号の変遷については、短音記号は、天台宗系統の譜本では鎌倉時代から使用例があり、讃嘆など、片仮名交じり文の譜本において和語を中心に使用される。真言宗系統の譜本では南北朝時代から使用例があり、漢文を訓読する声明において当初は漢語から使用され始めたが、室町時代以後に和語に波及していった。一方長音記号は、その歴史は短音記号よりも浅く、真言宗系統、天台宗系統とも南北朝時代から見られる。「延」については漢語に使用されやすいという傾向が見られる。全体として講式を中心に句末で多く使用される。同じ旋律型での同じ位置への施注、句末への集中から、短音記号の場合も長音記号の場合も、音楽上の要請によって記号が付された例が指摘でき、音楽上の要請によって付される場合が基本的用法であると確認できる。

次に言語との関連について、記号がどのような言語上の単位に対して付されているかという観点から次のように分類を行った。

- A 旋律の一部に対して付された長短記号
- B 軽音節に対して付された長短記号
- C 重音節に対して付された長短記号
- C 1 重音節の前位モーラに対して付された長短記号
- C 2 重音節の後位モーラに対して付された長短記号
- C 3 重音節全体に対して付された長短記号
- D 複数音節に対して付された長短記号
- E 音節間、またはモーラ間に対して付された長短記号

さらに、このうち B について、先行研究によって指摘された、短音記号が母音の無声化

を反映しているという説を、次の諸点に注目して検証した。

（一）四座講式だけでなく、その他の多くの講式譜本でも同じ特徴が取り出せるか。

（二）手続きとして最初から多くの例を除かなくても同じ特徴が取り出せるか。

（三）無声子音に挟まれた狭母音と、同じ環境に置かれた非狭母音を比べても同じ特徴が取り出せるか。

その結果、次のような分布上の特徴が抽出された。

無声子音に挟まれているという環境に付されやすい。

先行子音に関して、摩擦音が前に位置する狭母音に付されやすい。

後続子音に関して、破裂音が後ろに位置する狭母音に付されやすい。

これらは先行研究で得られた結果と基本的に一致しており、先に指摘した（一）（二）

（三）の点が、結果に影響を及ぼさないことが確認された。すなわち、講式譜本一般において、短音記号の特徴として から が認められることになる。ただし本稿の調査との相違点として、記号の種類ごとに大きな差異が見出せないことが指摘できるが、これは調査の範囲を広げたことによるものと考えられる。

については、無声化の一般的な条件と一致している。また、先行子音は摩擦音または破裂音の場合の方が破裂音の場合より無声化が起こりやすく、後続子音は破裂音または破裂音の場合の方が摩擦音の場合より無声化が起こりやすいという研究結果が複数の先行研究によって認められると言う。この無声化の特徴は と一致するため、講式譜における短音記号は母音の無声化の影響を受けて付される場合があると考えられることができる。

次に、「短音記号の一部は、母音の無声化が影響して付されたものである」という推定の蓋然性をさらに高めるために、具体例を挙げながらアクセントとの関係を見ておきたい。多くの先行研究によって母音の無声化とアクセントとの関係が指摘されており、「無声化する拍のアクセントが高く、次の拍が低いとき」は無声化しにくいとしている。この、「核を担う母音は無声化しにくい」ということを念頭に置き、アクセントを反映していると言われる講式の節博士と、短音記号との関係を見た結果、短音記号が付されたモーラと、その直後のモーラのアクセントが高低となるものは、72 例のうち次の 5 例のみであった。

このようにアクセントとして高低となるものは少数であり、大部分が「マウシテ」に集中することから、アクセント核には短音記号が付されにくいという特徴を見出すことができる。この特徴は、母音の無声化の特徴と一致するものであり、短音記号が無声化を反映しているという推定を支持するものである。

このように短音記号が無声化を反映する

原因としては、分布上の特徴から、歌謡上で実際に無声化が行なわれたわけではなく、無声化が意識されやすい環境において母音が短く唱えられ、それが短音記号の分布に多く表れていると解釈される。

研究者番号：

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

1. 浅田健太郎 (2014) 「講式譜本における長短記号」『島大言語文化』第36号, 1-27頁
2. 浅田健太郎 (2011) 「声明譜における発音注記の「中音」について」『島大國文』第33号, 29-52頁

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

浅田 健太郎 (Kentarou Asada)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：50346045

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )